

イタリア旅行情報サイト JAPAN-ITALY Travel On-line  
イタリア美しい風景～熟年の旅～

16 aprile 2007

Il Bel Paesaggio dell'Italia

この素晴らしき美のかたち(1)



近藤 節夫



●見落としがちな真の魅力

'ITALIA NOW'...それは古代ローマの歴史的再デビューであり、はたまた遙かな古へのノスタルジアを感じさせてくれる、ゆりかごのような存在でもある。

いま地球の隅々から多くの観光客が押し寄せるイタリアは、掛け値なしに世界のナンバーワン観光立国であり、観光大国である。釣りマニアは俗に「鮒釣りに始まり、鮒釣りに終わる」と云われるが、観光ワールドこそ「イタリアに始まり、イタリアに終わる」と言っても過言ではない。斯様にイタリアは初めて訪れる旅行者、幾度となく訪れるリピーター、或いは芸術の奥義を極めようとする芸術家らにとっても、魅力溢れる情熱的なエクスタシーとファンタジックな尽きせぬ想いを募らせ、創造性を育んでくれる母のような国である。

私はこれまで40年近くにわたり、たびたびイタリア各地を訪れ、その都度イタリアの文化遺産に感動し、その奥深い魅力とカリスマ性にとり憑かれた「イタリア・パパラッチ」のひとりである。ローマ帝国がヨーロッパ大陸を席卷し、怒濤の勢いで地中海沿岸から西アジアまで侵略して行ったDNAは、いまま古代ローマ文明の痕跡として、グローバルにそのロマンとエネルギーの潜在力を留めている。

この点でわれわれ現代人は、古代ローマ人に大いなる敬意を表すべきではないだろうか



思っている。中世イタリア・ルネッサンス期に開花した文化・芸術、洒落たファッション・センス、明るく開放的なラテン民族気質、イタメ

シの食文化、古代ローマ時代の遺跡の数々、そしてワールドカップ優勝のサッカーチームまで、どれをとっても現代人の心を捉えて放さないイタリアならではの宝物である。私はこの魅惑的なイタリアを訪れるたびに、古代ローマ人がその文化を通して放つオーラに、めくるめく圧倒されるのである。

イタリアの熱く躍動するパッションは、そこにいるだけで私たちの心をわくわくさせてくれる。多くの人たちがもっとイタリアを訪れ、イタリアをもっと知ってもらいたいと願わずにいられないのは、イタリアを知らないと古代ローマ人の精神的琴線に触れる、せっかくの機会を失うようで、なぜか損をしたような気がするからである。

イタリアと言えば、何とはなしに肩肘張らない普段着という印象がある。気楽に自然体で向き合えるのがいい。もちろんいざとなればTPOに応じて、シャキッと決めるのは彼らイタリア人の得意技とするところだが、一方で部外者にとっては、ラテン気質丸出しでそのパフォーマンスにいささか首を傾げざるを得ない一面もある。これが気難しい紳士淑女にとっては許せないようだが、人懐っこさのような人間的な魅力があることも否定できない。生真面目な日本人の気質とは対極にあるが、妙に気脈が相通じ、実に邪気愛すべき民族なのである。

### ●自由奔放ゆえに個性的・芸術的

イタリアについて想う時、いつも随いてまわる他愛のない疑問がある。そのひとつは、ベルルスコーニ前首相のような、公私両面でとかくの噂が絶えなかった人物が、再び国家の最高権力者の地位に復帰するようなドラマチックな展開がなぜ可能なのかと不思議に思う。とても常識的にも社会通念上も考えられない。ましてやお堅い国では想像すらできない。

ところが、このイタリアというのは、れっきとしたお堅いはずのカトリック教国である。それにも拘わらず、前向き志向で楽天的なイタリア人は、マイナス面を補ってあまりあるプラス面を評価するようだ。敢えて言えば、清濁併せ呑むことをむしろ潔しとする。まさに二律背反を地で行っているのがイタリア人なのである。第二次大戦末期には、連合軍がマフィアと取引をしてゲリラ組織を壊滅させたというマフィアへの負い目からか、アンドレオッティ元首相のような有力政治家ですら裏でマフィアと手を組んでいたと噂されるほど、ファジーでヤクザっぽい国でもある。



しかし、どうだろう？その好い加減さ、ある面で本能の赴くまま、自由気ままに行動した結果が、思いがけない意外性や創造性、そして独創的な面白さを生み出してくれるプラス面もある。それがイタリア人のセンス、知性、思想、哲学、行動力学等に繋がり、古代ローマ帝国時代や文芸復興といわれるルネッサンス期に、イタリア文化

が華開いた源泉であると考えられないだろうか。このようにイタリア人の抜群の美的センス、創造的なファッション性、ソフィステイクされたデザイン等の顕在化は、まさに現代においてもイタリア人たる真髓が如何なく発揮されるグラフィティと言えるのではないかと思う。

もうひとつ都市構造上気になっている素朴な疑問がある。ローマ市内の観光名所、古代都市フォロ・ロマーノが都市設計上現在のローマより幾分低地に構築されていたことである。なぜだろうか？

考えてみると古代エルサレムもそうである。インダス文明のモヘンジョダロもそうであり、イスタンプールの地下宮殿もしかりである。古代より人類は穴居生活を送っていた生活体験の名残で、地下を上手に生活の場に利用することを学んでいた。その叡智と工夫は土木工学的に整備された古代ローマの地下上下水道網となって、当時の市民階級に恩恵をもたらし、そのおかげで古代遺跡は現代社会にも大きな示唆と知恵を与えてくれているのである。そんなこともイタリア各地を巡っていると古代文明が教えてくれる。まさにイタリアは悠久である。

\*\*\*\*\*

さて、イタリアについて想像を巡らせるときりがない。本サイト上では、古代文明のイタリア賛歌からしばし離れ、私が視覚的に、かつ情緒的に心ときめいたイタリアの自然風景の素晴らしい土地を推薦したい。ここでは、とりわけ気に入っている南部の①カプリ島、②アマルフィ海岸、中部の③アッシジ、北部の④コモ湖、⑤コルチーナ・ダンペッツォ、⑥ベルニナ鉄道沿線、の6箇所について次回から3回に分けて紹介してみたい。

イタリアの自然と風物に触れ、ローマ人が造営した古代遺跡以前から有するイタリア自前の魅力にどっぷり浸って、目に入るあるがままの現代イタリアの魅力を皮膚感覚で感じ取っていただければ幸いである。

著者プロフィール

近藤 節夫(こんどう せつお)

昭和 13 年東京都中野区生まれ。(社)日本ペンクラブ会員。エッセイスト・旅行ジャーナリス

トとして、精力的に著述活動を続けている。学生時代の「60年安保闘争」体験と、若いころの海外ひとり旅による危機一髪のリスク体験から、広く「臨場感」の大切さを啓蒙している。日ごろより知識の蓄積のうえに、現場の第一線で汗を流さなければ本物ではないと、持論である現場体験の重要さを主張している。40年間旅行業界にかかわり、この間被発給旅券12冊、海外渡航歴約200回、渡航先国71カ国で、旅行業界で長らく国家試験講師、研修試験委員を務め、旅行業界誌等に度々寄稿し、シンポジウムでも持論を提言して「旅行業界の彦左衛門」とも称された海外旅行のプロである。

著書に「現代 海外武者修行のすすめ」(新風舎刊)がある。

---

### もっとイタリアを知る イタリア美しい風景 ～熟年の旅～

| [もっとイタリアを知る アルキーヴィオへ](#) | [このページの TOP へ](#) | [HOME PAGE へ](#) |

<http://www.japanitalytravel.com>

© JAPANITALY.COM srl - MILANO 2000 All rights reserved.